

## 戴 名 世

——公・私の矛盾とその展開<sup>(1)</sup>——

須 藤 洋 一

方苞に始まる桐城派古文は、春秋戰國時代以降清代に至る二千年の中國散文の傳統を受け繼いで形成され、一つの總括的形態として清代散文の主座を占めたのち、民國初年の文學革命における近代文學との對立・相剋の中で敗北してゆく知識人の文學活動である。その形成・發展・衰退の過程は、中國知識人の言語意識あるいは世界觀の一連の展開として捉えることが可能であり、範圍を初期の形成過程に限っても、問題とすべき點は少なくない。本稿はかかる關心のもとに、方苞の十五歳年長の友人、戴名世<sup>(2)</sup>の行動と文學をそれ自體として考察し、桐城派古文の母體の一角を明らかにしようとする意圖するものである。

戴名世（字田有・褐夫。號は藥身・憂庵・南山。また一名宋潛虛とする。安徽桐城の人。一六五三—一七一三）はその著書が惹き起した康熙朝の文字獄、『南山集』案<sup>(3)</sup>によって知られる。二十年來の友人であった方苞はこの事件に連坐して入獄し、辛くも死を免れるが、名世は刑死し、著作は禁燬に處せられる。後世の評價は民族主義者とする説と「科學の士」とする説に分れ、現代中國のそれも一定でない<sup>(4)</sup>。筆者の見解は、基本的には名世を矛盾の人と捉える説に連なる。

## 一 視點と前提

戴名世が一個の矛盾であるという時、それは彼の生涯に關わることであつて、單に一時期の様相のみを指しているのではない。しかし名世の抱えた矛盾がどのような態のものであつたかを考える場合、その晩年に起つた『南山集』案は、いわば名世における矛盾の象徴として、重要な意味をもっている。

事件の發生は康熙五十年（一七一一年）、名世五十九歳の多である。當時彼は進士に及第して長い不遇の時代に終止符を打ち、中央官僚（翰林院編修）として清朝に仕える身であつた。これが一轉して「謀叛」の罪に問われるのは、諸生時代の古文集『南山集』が是非を轉倒し、狂悖の語が多いとした、左都御史趙申喬による彈劾に端を發する。これを受けて翌年春、刑部等は『南山集』『予遺錄』に「大逆」の語ありとし、名世については直ちに凌遲の刑に處するべく、また『溘黔紀聞』を著わし、貴州・雲南に據つた南明に關わる記述が名世の多く採るところとなつた方元成（字孝標。號鈍齋。安徽桐城の人）についても「大逆」のかたよりその故人の死骸を暴いて刻むべしと、このほか兩者の一族および『南山集』にその名の見える友人・知人等に對しては、それぞれ立斬・流刑・降職などの刑に處するのが相當、とした上奏がなされる。これに對して明くる五十二年春、康熙帝より最

終的な上諭が下り、名世は一等罪を減じられて處斬、他の者も罪を減じられ、この結果、命拾ひした者は三百餘名に上った。

その規模の大きさにおいて、事件は清代有数の文字獄であったが、社會的な意味はさておき、戴名世との關わりでいえば、これは同時代のある部分——支配の側——からする、名世の文學と生涯に對する評價であるといえる。例えば御史趙申喬の告發が名世に關して「狂悖」「狂誕」「狂妄」なる語を連ね、異常者として激しく非難するのは、名世の思想・言論が體制の埒外にあることをいおうとするものであるし、また刑部の彈劾がこれを「大逆」とするのは、さらに進んで、名世を敵對者として明確に位置づけるものである。

この清朝による名世への評價が當を得たものかどうかは、また別に問題とすべきであるが、豫め筆者の考えを述べれば、その評價は名世の一面に關する限り、少しも的をはずれてはいなかった。事件は、名世が自らを清朝の支配體制に組み入れようとしたと同時に、清朝に對する否定者でもあったことの當然の結果であり、冤罪というべき性格のものではない。そしてまた、そこで問われたのが諸生時代の發言であつたにせよ、事情は一個の矛盾ともいふべき存在がその矛盾の一面を突かれたのであつて、轉向者が轉向以前の過去の言動を問われたのではない。名世が早くから明朝への深い傾斜と同時代に對する激しい反撥ないしは拒絶を示す一方で、同時代における地位・名聲を欲し續けたこと、したがつてその一生は對立的な二つの志向が交錯し衝突する歴史であつたこと、等は次に示されるような名世の經歷によつても、ある程度窺われるはずである。

清の順治半ば、地位の低い讀書人の家に生まれた名世は、明の遺臣として山中に隠れた曾祖父の感化のもとに、少年時代を過す。家は貧

しい小地主である。二十歳の頃より時文の教授を始め、二十八歳で縣學生に補せられる。やがて鄉試を受験し、落第(三十二歳)。翌年、貢生に選ばれ、さらに翌年、太學の學生として北京に至る(三十四歳)。この間、名世は曾祖父と父とを失つた。時文教授のかたわら桐城を中心に各地で明に關わる遺編を收輯する。入京後は正藍旗教習に補せられ、また知縣を授かるが、受けない。北京で二度目の鄉試を受験し、再度失敗(三十五歳)、太學の友人とともに山東を遊歷したのち北京に歸り、ここでやはり太學の學生として入京した方苞と對面する(三十九歳)。このうち、祖父と妻とを續けて失ひ、北京での生活を打ち切つて南京に移住する(四十二歳)。寓居は方舟・方苞兄弟の家に近く、名世はしばしば往來した。以後、一時北上して北京に滞在し、また、學使に招かれて二度浙江に赴くのを除き、概ね南京での生活が續く。四十九歳の年、門人尤雲鵬が名世の古文百十餘篇を刻し、『南山集』とする。桐城南山への歸隱の心を示したものである。これは翌年南京より居を移して實現を見た。しかしこの隱遁生活は僅か一年餘で打ち切れ、五たひ入京した名世は第五十九名で順天鄉試に合格、舉人の資格を得(五十三歳)、さらに會試に應じていったん退けられたのち、再度の受験によつて進士に及第、一甲第二名の成績で翰林院編修を授けられるのである(五十七歳)。文字獄『南山集』案はこの二年後に發生した。

たしここに記した經歷は、主として名世の行動に着目するものであつて、直接にはその内面を語らない。名世の文學者としての經歷を別に説くとすれば、ここでは三つの異なる時期における彼自身の自己批評を引くのが適切と思われる。というのは、それらの發言は文學論のかたちをとりつつ、名世の矛盾の意味を解くための——すなわち、

普遍的な言葉で語るための——有力な視點を提供しているからである。

康熙二十八年（一六八九年）、戴名世は友人何焯（字岬瞻。江蘇長洲の人。一六六一—一七二二）にあてた手紙で、文學に對する自らの見解と心境を次のように記している。

今夫文章之陋久矣。妄庸相授、日日已甚。僕嘗以爲文章者非一家之私事、至今日而不得不引爲一家之私事、默守其是而已。（與何岬瞻書「南山集卷五」）

時に名世は三十七歳。この一節は彼が文學一般をどのような視點から捉えていたかを端的に示して興味深いが、ここで「一家之私事」に對立する概念を姑く「天下之公事」とするなら、これに相當する視點は、名世の最初の古文集の序において、早くも据えられていたといえる。と同時に、手紙にいう「嘗て」の考えも、最小限その時點まで遡り得る。序は名世二十九歳の執筆である。

有道於此焉、驅天下之人揚眉瞬目、以從事於其間、則豈非文章之爲道歟。（「初集原序」南山集卷二）

むろん、この一般論の形をとる文學への期待が、同時に自らの文學に對する期待でもあること、というよりむしろ、自らの文學こそ「天下之人」を目醒めさせ、「道」に至らしめる典型でなければならぬと意識されたであらうことは想像に難くない。「初集原序」の不遇の嘆きに潛む強い自負は、それを思わせるに十分であり、「與何岬瞻書」が示す、自身の文學に對する無力感、限界の自覺は、その自負の裏返しに外ならない。書簡執筆時の名世にとって「天下」とは「彼妄庸人者、如今之所謂名士、開口說書、執筆屬文、天下之人皆其流輩、以故從而稱之、雖語以是非之故、皆不省」という救い難い社會であり、從

って彼自身は「如僕者、氣力單弱、視其猖狂恣肆、而不敢撻拄其間」として手を拱くのを餘儀なくされるのである。

理念の喪失ともいうべき文學觀の轉回に際し、最も有力な契機として働いたのは、この、「天下之人」を動かすことがいかに困難であるかという自覺、自身における「公事」の斷念であつたはずであり、十一年後、四十八歳の名世が再び理念としての「公事」に氣弱い執着を見せる（杜溪稿序）のも、それは自己の文學の解説と無縁でない。

つまるところ戴名世がこれらの發言によつて直接間接に明らかにするのは、自己の文學觀が公・私Vの概念を基本的な枠組としつつ、公Vから私Vへの轉換を餘儀なくされ、それが名世自身の文學的營爲における不本意な轉換——挫折——に基づく、ということである。

ここで注釋を加えれば、名世がその文學の軸として志したもの——自身における「公事」とは明史の執筆を指し、志の由來は時代の態様と密接に關わる。

名世の生きた時代とは十七世紀中葉から十八世紀初頭まで、清朝の年號では順治の半はから康熙の末近くまでの約六十年間、明末の内亂に乗じて關内に入った異民族王朝が、軍事的征壓、言論統制、知識人の懷柔等、硬軟兩様の方途をもつて漢土に支配權を確立し、統一と安定を目指す時期である。明末、滿洲族に抵抗し、清朝に仕えなかつた黃宗羲、湖南の山中に隠れた王夫之、が當時なお存命であつたことは、時代の一つの特徴を示すものであるが、しかし名世の眼には、時代は明末の記憶を急速に失いつつある社會として映る（「金正希稿序」南山集卷三）。他方、曾祖父・祖父を中心とする族人からは明末の狀況をこと細かに傳えられ、この周圍による記憶の傳承と時代一般の記憶喪失との落差が、名世に孤立感と傳承者としての使命感とを植えつ

け、彼をして明史執筆に驅り立てるのである。その論證は別稿<sup>(四)</sup>に説くが、名世の志に關する筆者の見解は、大略次の通りである。

(一) 戴名世の文學的な營みとしての第一義の志は明史の執筆であり、それは記憶の傳承という性格をもつ。(二) その動因は、社會の記憶喪失、族人からの記憶の傳承、儒者としての「天下」に對する責任意識である。(三) 明史執筆の目的は、清に對する復仇、明の再興にある。(四) 執筆の前提となる隱遁は、危險を孕む現實世界からの逃避であると同時に、明朝と運命をともにする八公のな行爲でもある。これによつて明史の作者としての資格を得、明史に託して再び現實に働きかける際的作用を強めようとするのである。

以上、本稿はこの四點を前提とし、主題として名世の矛盾の意味と、矛盾の運動の獨自の様相を追う。むろん、名世の矛盾が、その質・性格においていかに普遍的であり、その深刻さ、あらわれ方においていかに極立っているかということは、この稿のみによつては明らかとなり得ない。今はただ、かかる矛盾が清代の漢人知識人に多かれ少なかれ共通のものであり、それを凝縮し、顧在化したかたちで名世の矛盾とその必然としての文字獄があつたという見解を、假説として提出するにとどめる。

## 二 世界觀の構造

前述の要約によつても知られるように、戴名世における八公・私の概念は單に文學理論の枠組としてあるだけでなく、より廣く世界觀の基本的構造として名世の意識を貫いている。形成は比較的早いと思われるが、八公・私論として集約的な表現を見るのは、名世四十六歳、南京滞在中の執筆に係る「命說」(南山集卷一)においてである。

まず、運命には一個人の運命と天下の運命との二種があるとし、次のようにいう、

所謂一己之命者、或生或死、或富或貴、或貧或賤、莫非其命爲之、而無與於天下、此庸衆人之命也。

だが「君子」「小人」の運命はこれと異なる。

世之盛也、天下之命生則君子生、天下之命富貴則君子富貴、君子者不以一己之命爲命、而以天下之命爲命。苟其不然、則君子死、則君子貧賤、君子死而小人必生、君子貧賤而小人必富貴、小人生而天下皆死、小人富貴而天下皆貧賤。

ここには「公」と「私」と、共に一語として見當らないものの、名世が關心とする角度から全體社會と個人との關係を論じたものとして、筆者はこれを八公・私論と理解する。むろん、ここで名世が示すのは單純に全體社會—公、個人—私、として片付けられる關係ではない。例えばその固有の運命によつて生死・富貴貧賤それぞれ様相を見せるとされる「庸衆人」(凡人)の場合、もし「無與於天下」の語が、「一己之命」は「天下之命」に規定されず、「天下之命」もまた「一己之命」に左右されない、の兩意を含むとすれば、それは完全な隔絶を意味し、「天下」と「庸衆人」とは互いに疎外された關係にある。「庸衆人」の行爲・運命は「天下」に關わらない點で八公・私の領域に屬するが、しかしそこには全體と個という意味での八公・私・關係は成立しないのである。

他方、「天下之命」に關わるとする「君子」「小人」はどうか。「君子」は「天下之命」を體現するそれ自體八公・私的な存在であり、「小人」はその「命」を「天下之命」と共にしないことによつて八公・私的な存在であると同時に、「天下」と「君子」とに對立し、これらを滅

はさすにいいない攻撃性をもつ。等しく公私的存在であるとはいへ、「庸衆人」が「天下」に疎外されつつ並存しうる點で靜的であるのに對し、「小人」は極めて動的であり、前者を非公私とすれば、後者は反公私と規定することができよう。

「命說」の視點は、その者が「天下」に關わるか否か、關わるとすればどのようにか、というのであり、生死・富貴貧賤は、それ自體としては價值判斷の對象とならない。それらは「天下」との關係において初めて肯定、あるいは否定されるのであって、「天下」との作用の有無とその方向とが、人を「庸衆人」「君子」「小人」に振り分ける指標であるといえる。

かかる世界觀がいつに始まるか、正確な時期は斷定し難い。しかし基本的な骨格は遅くとも二十代初期には形成されていたと考えられる。根據は、明末、宦官魏忠賢の一黨と鋭く對立して虐殺された同郷の先達、左光斗の傳（「左中毅公傳」南山集卷七。名世二十四歳の執筆）である。「天啓初、與給事中楊漣俱以清直敢言負重望、每國家有大議、公卿大臣輒問二臺省云何。二臺省者、即光斗漣也。兩人公忠一體、有所舉劾、必諮而後行、權貴人皆凜凜畏之、一時海內有道高名之士、皆從之游、而小人之趨利貪權勢者、皆弗之便也」という、「清直敢言」の士が「國家」の重要決定に參劄し、「利」と「權勢」に貪欲な「小人」がこれを快しとしない圖は「衰世」の危險を孕んだ「盛世」といえようし、傳の贊に「天啓初、正人在位者不少、相繼覆滅、海內寒心、而逆黨根株蔓延、雖以烈皇帝之英武、不能盡爲掃除、竊位釀亂、至於亡國、哀哉」というのは、名世にとって明の滅亡が「盛世」から「衰世」ないしは「亂世」への移行であつたことを示すものである。この見解はやがて、桐城を中心とする明末の史實を記した「予遺錄」

（南山集卷十四）に明瞭となるが、「天下」「國家」の運命は、「君子」と「小人」の力關係による、という認識が、左光斗の傳を執筆した名世にすでに確立していたであらうことは疑う餘地がない。

ところで「命說」の説く作用の關係は著しく均衡を失っていると思われるが、それが單なる修辭上の理由によるのではないなら、「君子」の「天下」に對する作用が記されず、「君子」が「天下之命」に支配される受身の存在としてのみ示される一方、「小人」の「天下」に對する否定的作用が強調されるということ、そして「君子」と「小人」の對比が、前者の死・貧賤、後者の生・富貴という、「君子」の悲劇として表わされること、の意味はどのように解すべきか。「初集原序」の觀點に立てば、「天下之人」を「道」に至らしめる文學は「君子」の「天下」に對する作用として見ることででき、ここでは文學者は「天下」に作用を及ぼす能動的主體なのである。「命說」が「君子」の「作用」を缺落させるのは、かかる主體から受動的な客體への轉換を示すものというべきであり、これは文學論における「公事」から「私事」への轉換に對應するものであらう。この意味で「命說」は「與何吧瞻書」の延長線上にあり、世界觀の基本的構造は不變ながら、その表現された様式において、志（公事の實現）の衰弱した當時の名世の心情を映すのである。

### 三 挫折の要因

それでは、文學は「一家之私事」であるとの觀念を強いられ、「天下」に對する己れの非力を自覺するに至つた、戴名世の挫折の要因は何であつたか。——名世を「公事」に向かわせたとはほとんど同一のもの、時代と家の態様、及び自身の學の質が、名世を挫折に迫りやる當

の要因であつたと考えられる。名世において八公・私Vの矛盾は必然的である。

明の時代、名世の家は富裕であつた。「芥舟翁壽序」(南山集卷六)に彼は、「當戴氏之盛也」云々と、士の「禮讓」、家の「饒裕」を語った「諸父老」の言を傳えている。しかし「鼎革之際、家世零落」(戴母湯太婦人壽序 南山集卷六)と記すように、家は明末清初の動亂を境に没落する。これには曾祖父と祖父(一時期)の隱遁が關わる。戴家は當時、四十九歳と三十一歳の二人の働き手を失つたのである。また「先世藏書屢經兵火、無復存」(答朱生書 南山集卷五)と見えることから、家が實際に戦火を被つたことが、没落の主要な原因であつたかとも考えられる。

ともあれ、名世にとって明の滅亡は「盛世」から「衰世」への轉換であり、これに對應して戴氏の没落——富裕から貧困への轉落——がある。この時代と家との關係が、「命說」に示される世界觀の一つの重要な背景であることはいうまでもない。名世自身の志と行動はかかる推移を踏まえた時代認識(「敗壞之世」<sup>(山)</sup>「世衰道微」<sup>(微)</sup>)に基づいて意味づけられ、社會的な死(遁世)と明の再生のための自らの生(明史の執筆)が八公V的な行爲として支持される一方、社會的な生・富貴に連なる科擧とそのための學(時文の習得)は八私V的な行爲として厳しく批判される。この八私Vとはむしろ反八公Vとしてのそれであつて、批判は科擧の徒と進士・官僚とが利欲に走り、「天下」を顧みず、民を壓迫したとし、ここに明滅亡の原因を求める認識に裏付けられる。

にも拘わらず名世が「公事」の志を語りつつもその實現を延期し續け、他方、自らが否定する科擧の世界に近づいてゆくのはどういう理

由によるのか。

まず名世は家の貧困のために「學」の基本的な條件、「讀書」において恵まれなかつた。家に藏書なく、書物を購う金もなく、書物を借りるべき友人も少ない、他方、富家には膨大な藏書が塵に埋れて久しく眠つたままであると、「造化」の「不齊」を憤るのはその二十四歳の時である(「與朱生書」)。名世は六歳以降約五年間で塾師より「四書五經」を學ぶのであるが、史書と諸子はその大半が他家からの借用と思しい。儒學を基礎とする中で特に朱子らの理學を尊び、また儒家の古典にのみ限定されない博學を重んじるのは、時代の位置を示すものというべきであらう。その學の傾向はやがて清代の學の主流となる考證學に相通するが、しかし名世自身は自己の學を時代の大勢に基づくものとしては捉えなかつた。むしろ時代からの孤立として捉え、この孤立を原動力として博學に向かうさまが、名世二十九歳、南京滞在中の弟、平世を勵ます手紙(「與弟書」 南山集卷五)に見える。

五經二十一史、今之視爲土梗、而天下幾無讀書者矣。宇宙間物、人盡取之、獨讀書一事、留遺我輩、此固人之所不能奪。

かかる自覺を抱く一方、「不足以恣其觀覽」(「初集原序」)と、また「余困甚矣、而未學、以未學而更困」(「困學集自序」 南山集卷二)と嘆じるのはひとえに「家無藏書」というのによる。

單に貧困によつて讀書することを得なかつただけではない。二十歳以降には家計を援助するために時文の教授を始め、名世はその中で自己の精力を消耗してゆく。これ以前、名世は多病と貧困とが原因で塾師より時文を學ぶことがなかつたため、子弟への教授を開始するに伴つて、時文を作る訓練をも餘儀なくされるのである(「自訂時文全集序」 南山集卷三)。この、古文の世界から時文の世界への移行は、名世にと

つて一つの時代——青春とでもいふべきもの——の終りをも意味したようである。名世五十代の回顧にいう、

余年十七八時、即好交遊集、里中秀出之士凡二十人、置酒高會、相與砥礪以名行、商榷文章之事、當是時、意氣甚豪也、顧傲睨自喜、視天下事不足爲、而此二十人者、年皆與余相若、日相與往還議論、(中略)居無何、則各以家貧教授生徒、分散以去。(齊天靈稿序) 南山集卷三)

これ以後、名世は父が負っていた家計の重荷の一部を荷うと同時に、議論を交えるべき多くの朋輩と、讀書の時間とを失い、彼らと共に蔑視してきた當の「世俗」へ、自らを従わせてゆくのである。後年、「不得已而隨俗、作所謂時文、以之教授子弟」(與王雲濤書) 南山集卷五。名世三十三歳)と振返る。

しかし時文の教授を業としてのち、名世がいく度か科學を受験するのは、家計の維持という桎を越えるものといわねばならない。この動きは名世自身によってどのように説明されるか。例えば亡父の生平を記した「先君序略」(南山集卷九)には「兒子輩妄意他時富貴以娛親」とあり、不遇な父を楽しませるためだりに富貴を願ったというのである。また亡父の詩集を編んでその序に「小子能薄才劣、自恨無以發名成業、以振先人之盛德與其文章」(先大人詩序) 南山集卷二)とあるのは、傳承と顯彰を子孫の責任とした祖父の訓戒(書先世遺事) 南山集卷九)に應えた發言である。この「發名成業」が三十七歳の言葉「蓋余曾大父及大父、皆以高年待其子孫之有成、而余浸尋在苒、漸就廢棄、曾無所成就、以慰垂白之望」(贈張天問先生八十壽序) 南山集卷六)にいう「有成」「成就」と重なり、共に學業の成就、最終的には進士及第を指すとすれば、名世は同じ傳承の場において明史執筆、及び

「衰世」における「隱」と「顯」—— $\wedge$ 公 $\vee$ と $\wedge$ 私 $\vee$ 二つの志向を自らに背負い込んだことになる。

また「發名成業」「有成」を富貴と合せ考えれば、それは單に名世個人の「顯」への期待でなく、家の再興を期したものと思ふ。事實、戴家の盛時を傳えた前記「芥舟翁壽序」はそのような文脈において讀むことができる。名世の矛盾は明の再興と家の再興とを自身の役割としたことによって、より深刻である。

#### 四 $\wedge$ 公・私 $\vee$ の展開(一)

戴名世において「公事」の志は發生とはほとんど同時に種々の要因によって妨げられ、實現は絶えず將來に延期される。この延期の過程はすなわち $\wedge$ 公・私 $\vee$ の矛盾の展開過程であり、この中に、挫折感の緩慢な深化があったと考えられる。前節で説かなかった、挫折の要因としての名世自身の問題も、この過程を辿る中で明らかとなる筈である。

名世の挫折感の表白は、己れの境遇を「窮」の語によって示すのに始まる。語は家の貧困と志の果されない閉塞・不自由の意識に基づくであろう。それはまず名世二十四歳の近況を報せる手紙「答朱生書」に「僕二十餘年、憂愁窮苦、皆世所不多有」として現われ、讀書の困難を述べて「是僕之欲讀書而不得、此其所以窮之甚也」と、また郷人との尖鋭な對立の中での孤立感によって「嗚呼、若僕者天地間一窮人耳」とする。これらから、名世が「窮」をどのように捉えていたかある程度窺われるが、その明瞭な意味はやがて三年後、「窮鬼傳」(南山集卷十二)に示されることとなる。

康熙十八年、二十七歳の名世は督學使劉果(字毅卿、號は木齋。山

東諸城の人」の知遇を受ける。「南山先生年譜」所載の自注によれば、名世がその文を世に知られるのはこれに始まるといふ。「窮鬼傳」の執筆はこの年である。傳はまず「窮鬼」(貧乏神)の經歷を述べる。

窮鬼者、不知所自起。唐元和中、始依昌黎韓愈。愈久與之居、不堪也、爲文逐之、不去、反罵愈。愈死無所歸、流落人間、求人如韓愈者從之不得。閱九百餘年、聞江淮之間有被褐先生、其人韓愈流也、乃不介而謁先生於家。

「窮鬼」は古くは『山海經』(卷二)に見えるが、それは今關わらない。韓愈か文を作つて窮鬼を逐おうとしたとは、「送窮」の風習に基づいて執筆した「送窮文」を指し、名世の「窮鬼傳」は遙かにその文を受ける。被褐先生は名世の字、褐夫、に因み、褐は粗衣。名世は同年「褐夫字說」(南山集卷二)を書いて、「鄙人」たる己れには褐夫の語を措いて他に字とすべきはないとした。また『老子』(第七十章)に「聖人被褐懷玉」とあり、被褐先生とは外面は卑しいながら、内面に徳を藏する者であることを暗にいうてあろう。名世が自身、韓愈の古文を繼承しようとしたことは「答張氏二生書」(南山集卷五)あるいは「潘木崖先生詩序」(南山集卷二)に示される。

傳は「窮」の効用を説く窮鬼と「窮」を厭う被褐先生の對話として展開している。「高義」を聞いて門に入ろうと願う窮鬼に對し、先生は固く辭退する。韓愈は「窮」が原因で天下に容れられなかったというのであり、甚だ窮鬼を厭う理由としてその罪を數える。いま罪狀を割愛して項目のみを示せば、「窮於言」「窮於行」「窮於辨」「窮於才」「窮於交遊」の五つ、これは「送窮文」にいう智窮・學窮・文窮・命窮・交窮の「五鬼」「五患」に、内容的に異なる部分を含みつつはは對應する。これに對し、窮鬼は「罪」をそのまま「功」に逆轉させ、

次のように切り返す。

吾之所在、而萬態皆避之、此先生之所以棄余也。然是區區者、何足以輕重先生。而吾能使先生歌、使先生泣、使先生激、使先生憤、使先生獨往獨來、而遊於無窮、凡先生之所云云、固吾之所以效於先生者也。其何傷乎。

これは「窮」が文學の動力であり、文學世界の構造——無限大への膨張——を支えるという認識である。抑壓され、鬱屈した内部の力の迸出、激發といえる。

さらに、自らの「功」は「無窮」を可能にするに止まらぬ、として窮鬼はいふ。

且韓愈氏迄今不朽者、則余爲之也。以故愈亦始疑而終安之。自吾遊行天下久矣。無可屬者。數千年而得韓愈、又千餘年而得先生。以先生之道而嚮往者曾無一人、獨余慕而從焉。

韓愈の「不朽」が窮鬼の力によるとは、「送窮文」に窮鬼の言として「人生一世其久幾何、吾立子名百世不磨、小人君子其心不同、惟乖於時、乃與天通」とあるのに基づく。この「一世」「百世」の語はやがて名世の内部で「一世之人」「百世之人」という觀念に成長し「杜溪稿序」に時間論的な展開を見るが、「百世之人」なる概念が「不朽」とは同義であり、「窮」をその土壤とすることは、ここで確認してよいであらう。

「窮」が「不朽」を可能にするというのは、原理としては「窮」の「無窮」への轉化に等しい。たゞし「無窮」は「世」という「天下」に對抗する空間的な膨張であるが、「不朽」は「天下」を一瞬の「時」と見る時間軸における膨張であり、したがって、解放の度は「不朽」の方が遙かに大きい。



問答の末、窮鬼は被褐先生と居を共にするに至り、數十年後、すでにその用を果したとして、いずこへともなく走り去る。この結果は、「凡數十年、窮甚、不能堪、然頗得其功」という表現とともに、意味深重である。

「窮鬼傳」における窮鬼と被褐先生と、いずれか一方のみを名世の投影と限ることはできない。被褐先生における「窮」の形態とそれに對する感情、窮鬼の説く「窮」の意義、いずれも名世の心情・思想を映すものであり、兩者はそれぞれに名世の分身である。そもそも對話體というのは、内心の矛盾・葛藤を記すにはまことに恰好の形式ではないであらうか。

名世の矛盾は、この場合、「窮」を嫌惡し、それを遠ざけようとする「世俗」的な意識と、「窮」を「君子」相應の運命として受け入れようとする反「世俗」的な意識との對立として現われているが、しかしある意味ではそれは對立ではなく、同一の意識の兩様の展開と見ることも可能である。というのは、被褐先生、窮鬼双方とも、「窮」からの脱出を求める點に變りはないのであるから。相違といへば、被褐先生が「窮」からの現實的な脱出を目指すのに對し、窮鬼の説得が「窮」自體をベネとした觀念的な離脱——無窮・不朽——を説く、という方法上の差にすぎない。しかもこれらが二者擇一に見えて、實際には兩者の實現を圖っていることは、その結末に明らかである。まず「窮」によって「不朽」の資格を得、次いで「窮」からの現實的な脱出を得るというのである。

名世の矛盾が描く行程の方向は、一つにこの結末に豫測されるであらうし、それはまた「窮甚、不能堪」という句に裏付けられる。本來、「無窮」「不朽」のいずれとも、觀念による「窮」の超越である以

上、そこに「窮」による痛み・苦惱は解消する筈である。にもかかわらず、「窮」甚だしく、耐えることができないとは、名世における觀念世界の非力を物語るものでしかなく、かかる觀念の衰弱を表白する言葉は、例えば二十代の執筆と思われる「訂交序」に「思古人而不得見、往往慷慨悲歌、至於泣下」として、三十代には「世俗之類也、文章風氣尤壞甚、鄙人淪落荒山、無與告語、思古之人而不得見、往往悲歌、至於泣下」（『答張氏二生書』南山集卷五）と、ほとんど同様の表現で繰り返され、ここに紛れもない「窮」の自覺（窮於交遊）、孤立感がある。これが「獨往獨來」の裏の一面である。「窮」の現實が名世を「無窮」と「不朽」への飛躍に驅り立て、それらの觀念世界が崩れたところに再び「窮」の現實が横たわる、という不毛な循環運動が推測される。

觀念に比して現實がより強い牽引力をもち、自らのありようを「窮」として自覺することがしばしばであり、内部に貧困・不遇に對する嫌厭、富貴・聲望に對する欲望を潛ませていたとすれば、督學使の知遇に對し、名世がこれを「窮」からの脱出の好機と捉えて應えようとしたのは、自然のことといわねばならない。王又華（字靜齋、浙江錢塘の人）に、自らが「時之苦」に遭うこと人の江河に溺るる如くであるとし、「千尋之淵、鯨鱷之窟」に沈んで「水族萬怪」が争つて吞み碎こうとする今、これを憐んで救うのは先生の外にないとする懇願の手紙を送る（『與王靜齋先生書』南山集卷五）のも、やはりこの頃である。

## 五 八公・私の展開（二）

康熙十九年、名世は縣學生に補せられる。秋、江蘇句曲で督學使劉果に謁するが、歸ってほどない冬、父碩（字孔萬、號霜巖、又茶道

人、一六三三—一六八〇）が四十八歳で他郷に病没する。以後、家計の荷を負うことがいよいよ重く、名世自身、他郷に漂泊し、時文の教授と賣文とによって生活の糧を得ることとなる。

父の死は名世にとって深刻な事件であつた。單に家計上の理由によつてではない。父の運命に自らの運命を重ねることによつて、その死は重く受けとめられた。翌二十年、二十九歳の名世は父の詩集を編んでその序にいう。

嗚呼、士之窮而不怨者、豈不難歟。然其窮有所止、則其怨亦有所止也。至於窮之大者、其怨更深、而無所發洩、則必有以自鳴其怨、自鳴其怨而更有不能盡焉、則繼之以死。嗚呼、此吾先君之所以不獲永年也歟。（先大人詩序）南山集卷二

父霜巖は二十一歳で博士弟子となりながら家の貧困に逼られて子弟への教授を業とし、二十代の末以降は他郷にあって家人を養つていた。この經歷と人となり「醇謹忠厚退讓」（先君序略）、二十九歳が名世のそれと相似るばかりではない、内に「憂思」を抱き、「人間苦」をつぶさに嘗め、「家之人莫我信、外之人莫我知」と孤獨感を吐露する點でも、兩者は酷似した存在であつた。亡父の生平を語つた「先君序略」は、霜巖が飲酒によつて「憤懣」を解き、飲むごとにサイを振つて勝負に興じ、大酔したと面影を傳え、その死は「客死、早死、窮死、憂患死」であり、名世自身、死んでも恨みは盡きないと痛憤する。

さらにこの年夏、同郷の友人汪崑（字河發）に續いてその將來を期待された三歳年長の外兄、錢雲瞻（名不詳）が病死する。初め名世が病（マラリヤ）の床にあつたのを雲瞻がしばしば見舞い、やがて自ら罹患して歿したのである。父の死と共に雲瞻の死は名世に深い傷手を

與え、名世は祭文を作つて「嗚呼、世之惡直醜正久矣。君子所持者惟天、而天道如此、夫豈可問耶。」（祭錢雲瞻文）南山集卷十二）と天を呪つた。

名世が遁世を口にし始めるのは二十歳前後に遡るが、この頃より隱逸あるいは山中での著書の志が多く語られ、桐城・舒城の山水に遊ぶことも一・二度に止まらない。康熙二十一年には、山中に左光斗の舊蹟を尋ねる。また翌々年には明清鼎革時の隱士・烈士の傳を作り、「節」を稱揚。この前後、門人、友人への手紙に明史執筆の志を語る。

しかしかかる動向の一方には富貴・名聲に近づく現實的な努力があり、まず康熙二十三年（名世三十二歳）春、督學使劉果に手紙を書いて知遇を謝し、「發名成業」の期待に沿えぬことを恥しむ。つづいて秋、鄉試を受験。これには失敗するが翌年拔貢生に選ばれ、さらに翌年冬、北上して太學に入る。康熙二十六年、京兆試を受験。失敗。

この二度目の受験失敗がもたらした挫折感は大きかったと思われる。共に落第した友人蕭正模（字端木、號深谷、福建長樂の人）が、失意のうちに歸郷するに際しては名世自身「余之落第羈窮、且不知其所終極、竊自傷也」とする序を贈っているし、翌年から翌々年へかけての山東の旅は、太學の友人と共に傷心を癒そうとするものであつたと解される。この旅で名世は多くの詩を作つた。感情のはけ口としての詩である。旅を終えて再び北京に戻つた名世は自らの詩を集めてその序にいう、

同游者數人、與余皆困不得志。於是多賦詩以自遣。（中略）余行且歸隱故山、終身弗出、縱觀古人之詩、而因以有吐發憤懣之什、或有當乎。（齊謳集自序）南山集卷二、名世三十七歳

「與何圯瞻書」に文學は「一家之私事」と考えざるを得ない、と無力感を表白するのはこの頃である。

以後名世は約三年間北京に止まり、康熙三十年（名世三十九歲）、二十四歲の方苞を太學に迎える。この出會いにおいて名世が「吾非役役於是而求有得於時也。吾胸中有書數百卷。其出也、自付將有異於人、非屏居深山足衣食、使身一無所累而一其志於斯、未能誘而出之也」と語るのは、その矛盾の様相を明らかにするものであろう。都にあつて登第を試みる者である以上、齷齪として「時」の聲望を得ようとしていたのが名世の現實の姿であり、これは第三者の目に動かしようのない事實として映る。にもかかわらず、というよりは、であるからこそ、名世はこれを「非」として否定せざるを得ない。さもなくば名世の現實は言葉||意識の領分の直線的な表現として絕對化され、對外的にその全存在を呑み盡すからである。名世にとってこの「非」及びこれに連なる「吾胸中」云々の言葉は、自身の現實を相對化し、矛盾をそれとして持續させる働きをしている。先に兩様の言葉としての對立を見せた矛盾は、ここでは現實と言葉の對立として展開しているのであつて、これは一方の言葉（富貴・名聲に對する欲求）が現實に轉化する——科學中心の社會に踏み込む——に伴い、他方の言葉（窮・遁世の志）が言葉の領域を獨占することによつてかううじて均衡を保とうとするのである。

これはある意味では自己に對する寛容であらう。言葉と現實とを分離し、言葉によつて現實を相對化する限り、現實はかりそめの姿として、どのような形態をもとることができる。すなわち許容される。名世が隱遁の志を語りつつ、現實的に逆の方向を辿り得るのは、矛盾に介在するかかる許容に負うところが大きく、逆にいえば、名世が富貴

・聲望への方向を辿るためには、彼は絶えず隱遁を口にし、言葉を現實の彼方に投げ出さなければならない。と同時に、言葉と現實が乖離する時、それはまた、言葉が現實によつて相對化され、意味を希薄にしているということでもある。隱遁を語る名世の言葉が自らの側に現實を引き寄せ、意味を回復するまでには、名世はこの約十年の歲月を要するのである。

## 六 〈公・私〉の展開(三)

康熙三十一年冬、名世は祖父の死を葬うため歸郷する。翌年春、三たび北京に入るがほどなく南下し、六年餘の北方生活が終る。以後、四度目の入京を挟みながら、南京を中心とする江南の生活が始まる。賣文に平行して友人と共に科學受驗者のための模範答案集を編む。空間論的人間觀を集約した「命說」に對し、時間論的人間觀を語る「杜溪稿序」（南山集卷二）はそのような生活の中の所産である。

文は友人朱書（字字綠、號は杜溪。安徽宿松の人）の古文集への序として書かれる。時に名世は四十八歲である。

世有一世之人、有百世之人。所謂百世之人者、生於百世之後而置身在百世之前、唐虞之揖讓於廷、而君臣咨警、吾目見其事而耳聞其聲也。

以下、周の武王が殷の紂王を伐つ牧野の戦い、孔子と門人の學問の場、左氏・太史公の史書執筆の部屋、後代の戰亂、朝廷の内部、等に親しく身を置き、情況をつぶさに目撃しうることを述べる。

是則吾生於今而不啻生於古。自堯舜至今凡三千年、而吾之身已三千餘年而存矣。而吾所著之書、傳於後世之人、而後世之人讀吾之書、如吾之響歎乎其側、是則吾之身且與天地無終極而存也。此之謂

百世之人也。

名世によれば、「百世之人」とは現代にありながら數千年の過去に遡行して、例えば堯・舜・武王・孔子・左氏・太史公らと同じ空間に呼吸し、その時代を親しく體驗し得る存在である。しかもかかる時間の超越は、過去だけではなく未來に對しても可能であり、この結果、その身は天地と共に限らない永遠の生命をもつ。

これに對して「一世之人」の生命は甚だ短い。それは現在あるいは一時の事情、變轉に對應し得るだけの存在であり、生前・没後の過去と未來を知らない。

若夫一世之人、則止識目前之事、而通一時之變、雖其至久遠不過百年、以天地之無終極者視之、須臾而已矣。

「命說」の基本的な視點は「天下」と「一己」（一個人）との間の機能・作用の問題であつたが、この時間論にはそうした視點は全く見當らない。「命說」が價值軸を「天下」に置く儒家的な意識のもとに書かれているのに對し、引用部分の問題意識は個人の生命の長短に終始し、時間を自由に超越する永遠の生命といい、「一世之人」に『莊子』から「朝菌」「蟪蛄」の比喩を借りることといい、道家的である。「百世之人」とは道家の「永生」に連なる概念ではないかと考えるが、「一世之人」と共に出典は韓愈「送窮文」にあること、すでに見た通りである。

名世にあつて儒家と道家は必ずしも對立しないが、「命說」の「天下」中心の發想と、「杜溪稿序」中、前掲部分の「個人」中心のそれとはやはり一種矛盾の關係にある。しかしこの矛盾を内包しながらも、二篇の文は同一の生活・心情の表現——二篇の間隔は約二年——としての共通性を有している。すなわち、價值軸をA公Vに置くA公

・私Vの枠組の保持、この枠組の中での名世自身のA私Vへの傾斜、の二重の共通性である。例えば「杜溪稿序」は全體の論理をA公・私V論と時間論の組合せとして展開させており、朱書に言及する部分を除いて整理すれば、序は次の三つを暗示もしくは明言する。第一に、かつて名世は「一家之私事」に非ざる文學——「著書」によつて自ら「百世之人」たろうと志したこと。第二に、貧窮多事によつて「一家之私事」としての文學に従事せざるを得ず、自らが「一世之人」として終る惧れを抱いていること。第三に、やがて山中に隱遁して「著書」の志を果し、後世に傳わる存在となることを願っていること。——ここに明らかなように、「百世之人」の條件は「公事」としての文學であり、個人は「一家之私事」に非ざる文學によつて初めて永遠の生命を得る、というのが「杜溪稿序」全體の主旨である。

ここで「一家之私事」に非ざる文學として記される「著書」が、明史の執筆を意味することはいうまでもない。「網羅散軼」の語がそれを推測させるであろうし、もとより明史は清朝に對する復讐を用意するものとして、名世にとってA公Vの文學である。したがって彼がこの序で「著書」の志を語るとは、明史執筆＝A公Vの回復であるとも解される。

しかしここでより重要なことは、史をA公Vの文學としつつ、作者を後世に傳える手段として捉える史の把握の仕方である。若年の執筆と推測される「史論」（南山集卷二）によれば、名世にとって史は本來經世の道具であつた。「天下之用」に適うことが史の目的であり、時代の様相・變轉の原因を後世に傳えるとはこの目的を實現するための方法・手段である。しかるに「杜溪稿序」に論じられる史は、目的としての「天下之用」、手段としての後世への「傳」という關係を逆轉

させ、「用」を語らず、「傳」のみを強調する。しかも「傳」の對象は時代全體ではなく——「賢君相」から「亂賊小人」に至る全體を對象とする史においては、「百世之人」「一世之人」の區別はその意味を失う——、作者個人へと矮小化している。これは史の把握における公私の肥大、公私による公私の浸蝕、というべきであり、史における「用」の喪失は、「命說」にあつて、「君子」が「天下之命」に一方的に支配される存在として表現され、「天下」に對する作用が示されない、という「君子」における「用」の喪失（「君子」の一面の「庸衆人」——非公私としての公私——への轉化）に對應するものである。

この現象は史に限ったことではない。名世の文學規定における「天下之公事」から「一家之私事」への轉換とは、この、文學における「用」（天下之用）の喪失、文學機能の「用」から「傳」への移行、を意味するのであつて、「一家之私事」としての文學はこの二つの側面において、文學者としての名世に無力感と優越感とを與えるのである。

嗚呼、文章之事、雖非有用於世、而未可以爵位勢分緣飾於其間、亦視乎求序者之人與文何如、與序者之人與文何如而已。（「上韓宗伯書」南山集卷五。名世四十八歲）

というのは前者に近く、

嗚呼、天下事雖其榮華甚盛、然皆不踰時軌已飄零銷落、獨文字之在人間、愈遠而常存。（「贈韓某序」南山集卷六。名世四十四歲）

というのは後者に近い發言である。

つけ加えれば、かかる轉換の軸にあたるのが「窮」の意識であることは、「窮鬼傳」の文脈において明らかであらう。自己の存在が「天

下」に容れられない、才能が「天下」のために用いられない、と自覺する時、「天下救済」という空間への志向は時間軸への志向に轉するのであり、名世にとつてそれは「窮」なる儒者の自己解放を意味する。むしろこれが觀念世界への上昇であり、そこに手應えない脆弱さが潜むこと、やがて現實世界への墜落が待つこと、いずれもすでに説いた通りである。

## 七 文 章 論

戴名世が文章論・文學理論としてどのような見解を説いたか、これは以上、公私・私の展開として見てきた名世の思想と行動の軌跡を踏まえることが必要である。ここではもはや、名世の文章論を詳しく検討するだけの紙幅がないので、その概略を列挙するに止める。

(一)初期、文章に對する行動の優位が強調される。文章・行動のいずれも、「不朽」との關わりにおいて説かれることが多い。行動としては「節烈」、文章としては古文の修得による古人との比肩、が目指される。

(二)古文を治世（公）の視點から捉え、時文の隆盛が古道の發現を妨けているとする。古文・古學・古道が一體である。

(三)古の文、今の文の本質をそれぞれ「眞」「偽」とする。擬古文の摹擬、駢文の雕琢、いずれも「偽」であり、「飾」によつて「眞」（素顔）から遠ざかるものであるとし、時の経過と共に「偽」は滅び、「眞」が現われるという。「眞」に連なる概念として、「獨立」「自立」「情」「實」「自然」が説かれ、「雷同」「摹擬」「名」「剽竊」「雕飾」が「偽」に連なる概念として排される。前者は「君子」の文、後者は「衆人」「小人」の文とする。

(四) 本來の文章論の場は古文論と詩論——古文と詩とは表現方法において同一であるとする——であるが、時文の教授を業とするのに伴い、やむなく時文論(主として時文の方法論)を展開する。四十代以後にこの傾向が強い。

(五) この時文論において、時文は古文の一體(一形式)であるとし、時文は古文の「法」をもつて書くべきことを主張する。時文の場を借りて古學・古道の復活を圖るのである。△公△Vによる△私△Vの浸蝕といえる。史に對する姿勢と對照的である。

## 八 展 望

この稿を終えるに當つて、戴名世が自らの生活と生涯を顧みた總括の言葉を引いておきたい。一つは晩年の隱棲前、四十八歳の名世が、「北行日記」——北京を指しての旅の記録、に付した序である。

嗟乎、古之人濡手足、焦毛髮、勞其身、以爲天下經營、拮据其勤苦、豈特如此而已哉。而余所處、不過爲一身一家之計、而猶不能遂。窮巖斷壑之中、必有高人逸士起而笑余者矣。(「北行日記序」南山集卷二)

もう一つは隱棲を打ち切つて、再び世に交わる時期、名世五十三歳の發言である。

余少嘗有志於文章之事、而羈窮失學、輾轉汨沒、垂老無成、卽世所流布諸書、謬爲人士之所稱許、而私心耿耿、終有不能自滿其志者。(「張貞五文集序」南山集卷二)

名世の生涯と文學を通觀してみると、そこでの矛盾と葛藤は、自己と社會との關係をいかに設定するか、という問題をめぐつて終始したといつてよい。これが儒者としての名世にとって空間的な問題である

と同時に時間的な問題でもあったことはすでに見た通りであるが、個人における空間と時間の關係は、名世のみならず、文學者の多くに於つて、その文學の基本に關わる問題であると考えられる。名世におけるそれが、同時代全體の中でどういう位置を占めるか、その検討は今後の課題であるけれども、少なくとも名世が交わつた文學者の一群のある部分は、△公・私△Vというかたちでの空間と、「不朽」・「時」というかたちでの時間とが、意識の中心にあつたと推測される。王源(字崑繩、又或菴。河北大興の人。一六四八—一七一〇)はその一例である。

二人の交遊は名世三十代の北京滞在に始まり、王氏と名世とは萬斯同、劉獻廷らとともに南京での隱遁を約した間柄であるが、名世の「予遺錄」に與えた王序は、明の滅亡に對し、名世と共通する視點(公・私)からの論評を加える。

予嘗以爲、上下不同心、中外不一體、小人私而君子未必公、使不肖者借口、而賢才不得盡其用、天下魚爛蠹潰、坐視不可救藥、此明之所以亡。

また、王源の手になる「劉處士獻廷墓表」にいう、

嗚呼、生死無關於天下、不足爲天下士、卽爲天下士不能與古人爭雄長、亦不足爲千古之士、若處士者、其生其死固世運消長所關、而上下千百年中、不數見之人也。

ここに王源の世界觀は集約されているといえるが、しかしそれが實際の文學と行動とにおいてどのような展開を見せるかは、時代認識あるいは現實世界と觀念世界の均衡の如何に關わるであらう。本稿に見た戴名世の矛盾はそうした展開の一つの典型であつて、名世の友人であり、且つ同郷の後輩でもある方苞に關しても、その文學と行動は世

界觀の核——公と私、不朽と時という空間と時間の二極構造——が現實との緊張關係の中で生み出す運動として考えることができる。というよりは、かかる視點によつてこそ、方苞の文學と文學理論の意味はより明瞭となるはずであるが、この點に關してはやがて別の機會に述べることとしたい。

注(1) 本稿は第二十七回日本中國學會(一九七五年十月三日。於秋田大學)での發表「戴名世——公・私の矛盾と浸透」に基づき、一部修改を加えたものである。なお發表の際「窮」の概念が持つ重要性について荒木修氏より指摘を受けた。また、田仲一成・三浦國雄の兩氏よりは資料の閱覽・探索等で便宜を得た。本稿はこれらの恩恵をこうむることが大きい。誌面を借りて諸氏に感謝する次第である。

(2) 戴名世の傳記の主なものとしては、徐宗亮「戴先生傳」(『南山集』所收、蕭穆「戴憂庵先生事略」(『碑傳集補』卷八、「國粹學報」第七十二期、馬其昶「戴南山先生傳」(『桐城耆舊傳』卷八、「清史稿」卷四八九、合肥師範學院中文系古典文學教研組「戴名世」(『安徽歷代文學家小傳』所收)、Hummel 編『Eminent Chinese of the Ching Period』および Goodrich 編『Inquisition of Chien Lung』所收の戴名世の項等がある。年譜としては、戴鈞衡「南山先生年譜」(『南山集』所收)、研究としては、佐藤一郎「戴名世・方苞の交遊より見たる桐城派古文の成立」(『藝文研究』第十六號)があり、また同氏「清の詩文」(『國學院雜誌』昭和四十一年九月號)も戴名世に言及している。

(3) この事件を記述した主な資料は次の通り。「方孝標戴名世家」(影國棟『清史文獻志』所收)。「戴名世『南山集』案」(歸靜先『清代文獻紀略』所收)。「清史稿」聖祖本紀三。「東華錄」康熙八十八、八十九。また前掲の傳記・研究等も事件に觸れたものが多い。

(4) 歸靜先前掲書。

(5) 孟森『心史叢刊』一集。

(6) 前掲『安徽歷代文學家小傳』及び安徽人民出版社編輯『桐城派研究論

文集』所載の諸論文はそれぞれに評價を異にする。  
(7) 朱太仁「戴南山集序」(『新式評點：戴南山集』所收)。前掲佐藤一郎論文。

(8) 「姚符御詩序」(『南山集』卷二)「道虛園詩序」(同上)によれば名世の歸隱はさらに翌年(康熙四十二年)となるが、ここでは姑く「硯莊記」(同卷十一)と「南山集」方苞序に従う。

(9) 華文書局版『南山集』(民國五十九年。民國七年重刊本影印)を底本とし、諸本——秀野軒版『南山全集』(道光三十年)、『潛虛先生文集』(光緒二十一年)、張仲沅版『南山集』(光緒二十六年)、大連圖書供應社版『新式標點戴南山集』(民國二十三年)——を参照した。

(10) 「戴名世の志——明史と隱遁」(札幌商科大学・札幌短期大学『論集』第18號に掲載の豫定)。

(11) 「與弟書」(『南山集』卷五)。

(12) 「訂交序」(『南山集補遺下』「初集原序」)。

(13) 「意園記」(『南山集』卷十二)。

(14) 「自訂周易稿序」(『南山集』卷二)「河墅記」(同卷十一)「潘木庵先生詩序」(同卷十二)。

(15) 「青布潭記」(『南山集』卷十一)。

(16) 「曹先生傳」(『南山集』卷七)「李逢亨傳」(同上)等。

(17) 「與余生書」(『南山集』卷五)「與王雲濤書」(同上)等。

(18) 「上劉木齋先生書」(『南山集』卷五)。

(19) 「送蕭端木序」(『南山集』卷六)。

(20) 「南山集」方苞序。